

K会の数学をお薦めします。



尾高 悠志

K会OB

2001年アメリカ大会金メダル、2002年イギリス大会銀メダル、2003年日本大会銀メダル（筑波大学附属駒場高等学校在学時）

東京大学理学部数学科を経て京都大学大学院理学研究科数学・数理解析専攻修了、2016年から京都大学大学院理学研究科准教授。2020年に日本数学会春季賞と学術振興会賞を受賞。

■学問としての数学との出会い

数学を専門としない多くの方にとって数学は、他の学問もそうかもしれませんが、大学受験の前に試験対策で学ぶ数学のイメージのものかもしれません。それもそう簡単な数学とは限りませんが、ある意味で点数の習得や良い学校への入学などのゴールのためになることが（とかく感受性の豊かな）若いうちにこそ多いのではないかと思います。

学問は本来じっくりと物事の本質に向かい合って腰を据えて取り組んだ人類の長年の蓄積であって、点数の習得や成績の差異の判定を目的としたものではありませんし、効率的にできるとも限らないものだと考えています。

私の場合、数学者になりましたが、漠然とした憧れから入ってこの職業がどうした仕事を徐々に理解してハマっていく経緯において、10代の間にも二つの大きなきっかけ・出会いがありました。

K会に通って（私は3期生でした）、本格的な学問としての数学に触れさせてもらえたことはその一つでした。大学受験のための勉強や成績向上自体を目的とせず、学問の深みを堪能するということに重点を置いた学習プランというのはなかなか立てにくい貴重なものかもしれません。扱われる内容は大学や（場合によっては大学院）の数学科で専門的に扱われるものが多く含まれています。例えば多項式方程式を解くとはどういうことか、そのことに取り組んで式変形の技術の習得を超えて、対称性に基づいて別の視点を得たアーベルやガロアの話に本格的に触れようとします。当時全てを理解したとは言えませんが、それでも何度となく学問への感動の波が若い自分の感性を揺さぶってきました。

■数学オリンピック

一方でK会に入る前から"数学オリンピック"についても耳にしていた、すぐに自然と（内容はあまり知らないまま）憧れになりました。挑戦を経て長い月日を経てから振り返ると、それによって仲間ができたという点はとても（結果自体のことに限らずとも）大きいものでした。K会で、この度数学オリンピックに関わる講座ができる予定だという話を聞きました。数学オリンピックという名の下、青少年大会でしばしば行われる初等的で時間制限付きの難問解きの数学と、学問的な現代数学の差がどういうところにあるのか、あるいはどう関わり得るのか、それを論じることは昔から、そして今も難しく繊細なテーマです。

しかし私がK会生であった頃もそれらの間のはっきりとした差やその上での関連を、具体例を踏まえながら論じてくれた先輩たちがいて今の私に繋がっています。

数学は人智を超えたところにあると常を感じながら、数学の探究の日々は紛れもなく人生を豊かにしてくれています。そのワクワクの一端を若い頃に感じさせてくれるK会という貴重な場所を、大きな影響を受けた一卒業生として応援しています。